

温古知新⑨ 〈狭衣物語〉 1

笑顔礼讃西東

新柳会様(新潟市・秋葉区) 2〜3

爽樹俳句会様(埼玉県・川越市) 3〜4

反町正美様(茨城県・日立市) 5

投稿作品 6〜10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(こどもの頃なりたかつた職業は?) 11〜12

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 神山妙子様 14

新潟ぶらり／安善 風の館／巻菱湖記念時代館 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人高田正子様 16

2 February Vol.54

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース

夜楽

温古知新⑨

狭衣物語

新潟ではまだまだ雪が降りしきり、若干の引きこもり状態ですが、引きこもりついでに(？)、今回は平安時代に思いを馳せてみたいと思えます。

今回紹介するのは『狭衣物語』。平安時代、王朝末期の作り物語で全四巻。六条斎院宣旨(禊子内親王家宣旨)源頼国女が作者とされています。『無名草子』では「狭衣こそ、源氏に次ぎてはようおぼえ侍れ」と賞賛されている作品です。さて、あらずじ。

帝(嵯峨帝)の弟・堀川関白の一人息子である狭衣は、兄妹のように育てられた従妹の源氏の宮に人知れず恋しています。ある時、狭衣は源氏の宮に想いを告白するのですが、拒絶されてしまいます。その傷心を、偶然出逢った飛鳥井の女君に慰められますが、身分低い女君を侮って素性すら明かしません。狭衣を信頼しきれない女君は、身重の体で自分の乳母にだまされ筑紫へさらわれそうになり、船上で入水自殺を図ってしまいます。

同じ頃、帝の愛娘・女二宮と婚約した狭衣でしたが、気が進まず拒否し続けながらも、あろうことか強引に契りを交わし、宮は懐妊してしまいます。女二宮は、狭衣の男児・若宮を出産したのち出家。一方、嵯峨帝が讓位して東宮が

即位しますが、新帝への入内を予定されていた源氏の宮は、ご神託により賀茂の斎院へ。

狭衣は厭世の思いで参詣した粉河寺で、飛鳥井の女君の身内である僧(じつは飛鳥井女君の実の兄)に偶然出会い、飛鳥井女君の消息と彼女の生んだ自分の娘(飛鳥井姫君)の存在を知ってしまいます。女君の忘れ形見の女児会いたさに、女児が引き取られた皇女一品宮の邸に忍び込んだところを目撃され、心ならずも一品宮と結婚しなければならなくなってしまうのですが、案の定夫婦仲は終生冷めきったものでした。運命のつれなさに今度こそ出家を決意した狭衣でしたが、賀茂明神のお告げにより、父関白が出家を阻止！ 現世を生きるしかない狭衣は、源氏の宮にうりふたつの式部卿の宮の姫君と結ばれます。天照大神のお告げで狭衣は即位。しかし、栄光の極みにあつても、狭衣の心は源氏の宮や女二宮を想って憂愁に閉ざされたままだったのでした……。

主題・構成には『源氏物語』の顕著な影響が見えます。しかし、飛鳥井姫君の物語や狭衣の即位など、宿命観や幻想的描写が目立ち、主人公の優柔不断さや物語全体を覆う憂愁な雰囲気は『源氏物語』とはだいぶ違います。でも、これが当時の京の貴族社会の典型的な人物像で、身分階級が決まっっていて、動かしようのない現実と抵抗することを忘れてしまった公達たちの姿だったので。

『源氏物語』とは一味違った物語。ぜひお試しあれ。(古川久美子)

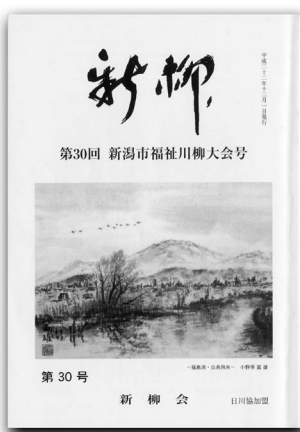
新柳会

柳都川柳社主幹

大野風柳さま

(新潟市・秋葉区)

昨年、創立30周年という節目を迎えた新柳会の講師をとめるのは柳都川柳社主幹、全日本川柳協会会長の大野風柳さん。年改まり、柳都が63年目、新柳会が31年目という新しい一歩を踏み出した大野主幹を訪ね、新柳会にお邪魔しました。



▶「新柳」30周年記念号

毎月第1土曜日に開催される当会も、1月だけは主幹の誕生日に合わせ1月6日に開催されるということだけで「一番喜んでるのは子どもたち、それでお祝いは済ませてねってこと」と大野さんも苦笑い。二宮会長のご挨拶、同人紹介に続き、主幹からのお話が一。

今日は新年でもあり、前半は私が考えていることをお話ししたい。昨年、

全日本川柳協会の会長に就任したが、ほとんどの人が会に加盟することで満足し、ここが問題だからこうしよう、という川柳を考える会にしたいという私の考えはなかなか理解してもらえない。川柳を詩、短歌、俳句と並べるというよりも、川柳でしか表現できないものがあるはずで、これを探し求めていくことが日本の川柳のテーマではないかと思っている。そんな時、『上方芸能』を発行している木津川計さんという方との出会いがあった。

木津川さんは「昔から、川柳は文芸ではない、じゃれだ」等と言われ、古くから劣等感を引きずっている。そういう引け目が弱さとなる。その弱さを突き詰め、表面化してみんなで検討してつぶしていこうよ」と言っている。私も引け目を持っているが、その弱味を強みにしたいと思っている点で、よき理解者を得た感がある。川柳はとかく今楽しければいいという甘さがある。俳人や歌人に比べ川柳家は往々にして勉強しないし、しなくていいと思っている。社会に通用する著名人がいないのも問題で、だからあんなものだと片付けられる。川柳をとったら何も残らない川柳家が多い。楽しむことから始め

ても、少しでも自分自身を変え、高めるためにやるもの。友達ができた、今まで素通りしていたのに足をとめて見るようになった、自分なりの喜びを持つればいい。そういう人間に変われば、川柳が変わってくる。表面的に変わったようでも、人が変わらないと川柳は絶対に変わらない。同じところを停滞しているだけ。



▶川柳への情熱で幾多の病も跳ね飛ばしてきた主幹

何かの刺激を受けて感動する。感動の自身が問題ではなく、感動したという瞬間、体感、それが宝物。その回数を増やしていくこと。中身ばかり求めても、それは知識であって知識だけでは感動は生まれえない。一人一人の持っている人間のパワー、存在感は実に大きい、みんなそれに気付かないだけ。感動は人によって違う。わずか五・七・五だけど、その中から自分というものが見えてくる、これが川柳の効果といえる。

川柳を底上げしたいという揺るぎない情熱の余韻を残しつつ、すぐに今日の課題「ひとにぎり」の講評にうつる。「二握の砂」の表現のように「ひとにぎり」とは、はかないものの例えにもなっているが、だからこそその強さもある、そんな意味でこの課題を出した。

没句、入選、秀逸、特選の順に読み上げられ、110句全てについて1句ずつ短くも適切な評がなされる。

◇没句
早苗手にひとにぎりにも祈り込め
内容はいいが表現がくどい。

一年の軌跡稲穂のひとにぎり
本人は満足しているかもしれないが、上手ぶった感じがする。
不景気に気軽外食ひとにぎり
言葉が多い。言葉を並べつながらを感じてくれじゃダメ、不親切。
一握の砂から漏れた企業秘密
下五が長いのは非常に損。いくらよくても字余りの欠点が出てくる。
ひとにぎり指の隙からこぼれ落ち
何が落ちてきたのか見えてこない。
でも、それを入れるとまたくどいと言われたりする。面倒なんですわ(笑)。その辺りは体感で理解してもらいたい。一句評は、一句一句聞いてわかるというのではなく何回か聞きながら続けることで感覚としてわかってくる。



▲73名の会員が毎月コツコツと研鑽を積んでいる

イクメンも一握りですイケメンも
言葉遊びが多すぎた。
ひとにぎりの没句ですが自信作

笑顔礼讃西東



▲自身の作品「蟹の目に二つの冬の海がある」を配したオリジナルの手提げ鞆

本人だけがそう思っているのではないですか(笑)。けなされて不満な方は手を上げて申告してください。こういうつもりで作ったんです、という声を聞きたい。

○入選
野仏にちぎった花をひとにぎり 富雄
ひとにぎりをうまく昇華しているが内容が少々古い。
一握の砂と思ひ出語り合う 秀三
センチメンタルにすぎず。
ひとにぎりで頭脳明晰とは迂闊 誠治
表現にちよつと無理がある。
時価という寿司をいただくひとにぎり 瑠美子
表現がいいですね。
大正から貰った知恵がひとにぎりキミ
「大正から貰った」がいい。表現と着眼がいいと入選します。
ひとにぎりにされて私が消えて行く みやび
これいい句だね。句は読んでみると新しい発見がある。作ったら声を出して読んでください、欠点がわかる。いときは伝わってくる。
ひとにぎりさせられたのか大人しい とし子
川柳になつてゐる。

◎秀逸
老い人も交せて下さいひとにぎりセツ
ひとにぎりの中に私も入れてくださ
い、という切々とした気持ち伝わ
てくる。
ひとにぎり塩加減ですこの旨さあきら
表現がうまく、巧み。
群れながら育つた雑魚のひとにぎり 与志子
内容が濃い。
ひとにぎりの土です種が待ってますたけし
種「を」にすると逆転するが、「が」
がいい。
ひとにぎり手からこぼれる砂もあるミイ
これもいい句。
*特選
ひとにぎりにぎつた砂に嘘がないかおる
格調が高い、清々しい作品。
■松の内も明けぬ雪降る中、これだけの参加者が一同に会することにまずはビックリ。毎月の「柳都」誌の他にいくつもの句会を抱え、さらに全日本川柳協会の会長という要職。バツサバツサと一刀両断で句をさばく小気味よさと瞬発力に本当に83歳?と2度ビックリ。入口は楽しい川柳柳であったも、突き詰めてそこに己を見なさい、というお話は、常日頃仰つている「川柳は人間を詠うもの、つまり自分を表現すればいいのです」の言葉と符合する。12時から新年会ということで、時間が足りないのでは…と心配する身に比して、ピシッと定刻通りに納める手さばき、まさに百戦錬磨のプロフェッショナルでした。(木戸敦子)

爽樹俳句会 編集長・あかね句会選者 川口襄さま (埼玉県・川越市)

昨年4月、小澤克己主宰の急逝により俳誌「遠嶺」は終刊となりましたが、旧役員会のメンバーを中心に検討を重ね、9月に小山徳夫さんを代表とした「爽樹俳句会」が誕生しました。その傘下の一つで、毎月第2土曜日に開催されている「あかね句会」にお邪魔してまいりました。

蔵の街と称され、「小江戸」の別名もある川越市は、神社・仏閣・旧跡や歴史的建造物が多く、文化財の数では関東地方で鎌倉市、日光市に次ぐという文教都市です。芽生えたばかりの「爽樹」の元、「あかね」ではどんな句会が催されているのでしょうか。

1時の開始時刻前には投句を済ませ、皆さまはお茶を飲んだりとご飲



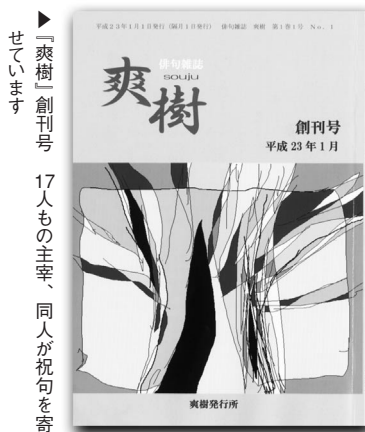
▲「あかね句会選者、爽樹」編集長川口さま

談。編集長兼「あかね句会」選者の川口さんのご挨拶に続き、一人一人が短冊に書かれた俳句を清記し、それを順番に書き写して本日の詠草集が完成。そのまま静かに選句を始めること40分。本日の互選の披講は芳賀さん、松本さん、山下さんのお三方。その後選者の「では、うらみつこなしでお願いします」の言葉を皮きりに普通選、秀逸、特選が発表される。

◎5点句

語り継ぐ祖父の生きさま白椿 幹雄
温かい家族のイメージが浮かぶ／おじい様の生きさまが「白椿」に集約されている／特別なことは言っていないが「白椿」という季語の幹旋がいい／生真面目で堅物だったであろう人柄を「白椿」が活かしている／でも椿は春の季語じゃない?／白にごまかされた(笑)／冬椿の方がいい?／でもそれだと印象が変わってくる／春になってからまた出してください(笑)。

一書待つ机上に障子明りかな 育代
皆さん「爽樹」創刊号を心待ちにしている。「障子明り」に期待と明るさを感じた／もう1つ創刊を待つ句があり



▶「爽樹」創刊号 17人もの主宰、同人が祝句を寄せています



▲本日の出席は17名、当季雑詠3句を出句

(後掲) 比較したが、想像の余地のあるこちらをいただいた／待っている情景がよくわかる。育代さんは編集委員だからなおのこと。

◎4点句

路地裏の童の声や石路の花 啓子

お寺の隅のあたりに咲いている石路の花と、明るい華やかな声のコントラストがいい／石路の花が路地裏の童の声とよく響きあっている／いかにも下町の風情／こういう句が好き。

潮鳴や雁木通りの小間物屋 育代

雪国・新潟の海辺あたりの景か。潮騒が遠くに聞こえ、さびれた小間物屋がある。その田舎道を通る淋しさをいただいた／珍しい季語に魅かれた。雁木は今でもある？／ありますよ／新潟で育ち、母に連れられて同様の光景を見た思い出があり懐かし

ていただいた／雁木の下は日も通らずに真つ暗。そんなところの小間物屋の佇まい。助詞も使っていないスッキリしたい句。

創刊を待つ一誌あり冬木の芽 和彦

「冬木の芽」が今は小さくてもこれから大きくなっていくぞーという気持ちを見現わしている／「爽樹」創刊号に投句した皆さんの、待ち遠しいという気持ちと将来に向けた想いを代弁している。

人參や三角巾の畳み方 哲心

因果関係はよくわからないが人參という季語と真つ白な三角巾の取り合わせがいい／畳み方という所作を持ってきたところに深みがある／「畳み方」に優しさが出ている。何よりも取り合わせがうまい／選者：何で普通選にしたのか、失敗したな！。哲心さん特選というわけにはいかなかったけど大丸(秀逸)にします(笑)。

釣舟の寄り添ひ山の眠りけり のぶ子

情景が浮かび、優しい気持ちになる句／冬の佇まいを想わせるいい句／海釣りとは違って一言も喋らずに釣っている山の静かな景が見える／「けり」でいい？「をり」がいいのでは？／「をり」だと眠っています、という感じ。

◎3点句

焚火の輪解け夕さりの一番星 裏

焚火の輪が解けたときに一番星、夕暮れの静かな情景が浮かぶ／静と動、燃えているときと終わったあとの

静けさが見事にマッチ／夕さりの一番星は金星かな。

冬渚夫の足跡さがしゆく のぶ子

よほど仲のいいご夫婦だったのでしょ／「冬渚」と「足跡さがしゆく」が合っている／物騒な句ですね、失踪した夫を探しているのかと(笑)／女性しか採りませんでしたね。

鷹一羽虚空の風を捉へけり 和彦

飛び方に焦点を当てているところがうまい／「虚空の風を捉へけり」がいい／一瞬を捉えたのかわからないが、そういう風に見えたのでしょうか。

◎2点句

没頭のひと日を妻の爛熟し 幹雄

随分優しい奥さまをお持ちでいいですね／何かに没頭して夕方になったら一本つけましようか、と。うらやましい／家では考えられない、勝手に飲めつて感じで(笑)／作者：家でも考えられない。ただ「妻」にしないと俳句にならないでしょ、いくら自分でつけていても(笑)。

めいつばい夕日を羽織る懸け大根 幹雄

真つ白な大根と夕日の赤、色の取り合わせもいい／「めいつばい夕日を羽織る」がいい。

教会の木椅子に冬の低日差しかな 啓子

堅い椅子に冬の低い日差しが教会のステンドグラスを通し、柔らかく射している／寒さと温かさを感じる句。冬天の塔見上げをり写楽貌 忠男

「写楽貌」が言い得て妙／これはスカイツリーですね。皆が一斉に見上げている様が、顎を突き出したさながら写楽の描く顔のようだったということか／「冬空」だとだめ？／「冬天」の方がより高さが出るし、「冬天」の塔の方が響きがいい。

■亡き小澤主宰の第二句集名からとったという『爽樹』は、大半が初めて編集に携わるといふスタッフが、何度も討議を重ね生み出されました。200名近い会員にもかかわらず、主宰を置かず、幹事会による合議制で運営しようという希少な会です。これも「遠嶺」時代にしっかりとした太い幹に仕組みができていたからかもしれません。あるべき姿を模索し、譲歩し、刷り合わせ：新しいことは一つ一つが大変です。でも皆さまの充実した表情が、いくつになつてもチャレンジすることの素晴らしさを実証していました。傘下には27もの句会があり、この苗木は横へ横へとどんどん広がります。皆さまもぜひ爽やかな新風に吹かれにきませんか。(木戸敦子)

▼びっしり4時間66句 すべてにあたります



笑顔礼讃西東

反町正美さま

(茨城県・日立市)

昨年11月、お父様が亡くなられて30年という節目の年に『反町勝美遺歌集 金盞花』をまとめられた反町正美さんにお話をお聞きしました。



▲『金盞花』函入りの300ページ強にもわたる大作



▲お孫さんが5人いるとは思えな若々しい反町さん

■以前からまとめようかと？

10年程前から父が「アララギ」や「ヤマビコ」に投稿した初期の歌を中心に、少しずつワープロに入力していましたが、そのままになっていました。92歳

の母が元気なうちに形にしたいという思いもあり、一昨年9月の退職を機に本格的に着手。図書館で調べたり、書庫の古い雑誌をあたりたりと、抜けている歌を拾い集めました。また、本を出すにあたり父と縁のあった場所を一度は歩いてみたいと、海老名市、逗子市、横須賀市の浦郷小学校や、教師として疎開した宗珪寺や元同僚の先生のお宅も訪ねました。皆さん快く父の話を聞かせてくださり、自分のルーツをたどるような旅でした。

■なぜそこまで？

なぜでしょうね。父は生前まとめてほしいなどと言いませんでした。ただ、きちんと箱に入れて遺してある原稿類を見て、何とかしたかったという父の想いを感じました。私は理系の研究職に就きましたが、国語の教師だった父は、本心では私に先生になってほしかったのだと思います。だからせめてもの罪ほろぼしの気持というか…(笑)。父が短歌を指導していた会員の方が「先生の歌たくさんあるけど本にしないの?」と言ったことも後押ししました。

■大変ではなかったですか？

催促されたわけではないし、とにかく完成させよう! という思いだったので大変とは思いませんでした。初期の歌は読みづらく、古語も多く、古語辞典を引き引き判読しました。自分でできるところはやり、あとはどこに出版をお願いしようかと思つたとき、幼なじみの同級生が本を出した御社のホームページを見ました。専門的なことや本のルールもわからず、大きい会

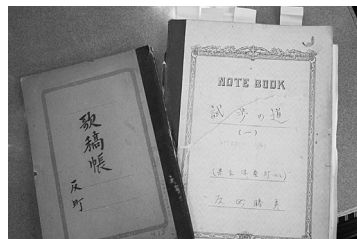
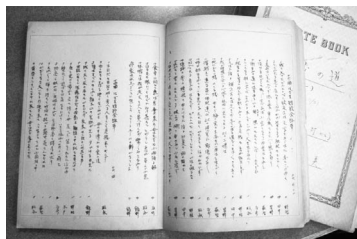
社ですとビジネスライクに進んでしまうと思ひ、きめ細かくやっていただけそうな御社に決めました。実際担当していただいた方は歌の表記について見てくださいたり、ページ数に納まるよ歌の数も希望どおりに納めていただくなどとてもありがたかったです。

■これからは？

週に1回、外国の人にボランティアで日本語を教えています。今頃になるまで、とにかくしつこくねばる生徒もいて毎回宿題を持ち帰ります。そう簡単ではありませんが、どうやらたらかつてもらえるか工夫したり、これがなかなか楽しいのです。また、半年間日立市民カレッジを受講し、先日は終了式があり受講生35名で卒業旅行に行ってきたばかり。いろんな仲間から刺激を受け、何か新しいことができればと模索中です。日本語教室の会議や予習もあるし、毎日飛び回っているんです。

■お父様、喜んでいらつしやるでしょうね。

父本人が本を出していれば違うまとめ方があったのかもしれませんが。歌集の範疇から少し外れるかもしれませんが、歌のほかに父の文章や歌の背景なども加えました。病弱であり話をする方ではなかつ



▲これらの歌稿帳、写真からこつこつと1冊にまとめ上げた

たので、原稿をまとめながら、こんなことを考えていたのか、と改めて会話をしているような息子としての貴重な時間でした。本当はこうまとめて…などと注文はあるのですが、せめて及第点はもらえるかな(笑)。母や二人の姉にも感謝され、自分でも今は長い宿題を終えてよかったなという晴れやかな気持ちです。まだやりたいことはあるのでこれで卒業です。一区切りつけ、次に向かいます。

★遺稿集の類は、ある程度の勢いといつまでにと期限の縛りがないと難しいものと思つていた。約1年前までは電気絶縁材料の劣化と安定化に関する研究をされていたというだけあって、地道にコツコツと積み上げるという反町さんなりのやり方で完成させた労作である。意図してか、しないでか、自分が遺した箱を看過することなくその想いを感じ取り、30年後に形にした息子に対し父は「よくやったな」と同時に「やってくれると思つていたよ」と大きな〇をくれていることでしょうか。災いを希望に転じたまさに「パンドラの箱」だ。(木戸敦子)

投稿作品

※ 今月も、沢山のすばらしい作品を投稿していただきました。今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。次回掲載分は3月14日(月)締切です。

俳句

- 1 豆炭の匂ふ風あり文士村
石井美智子(埼玉県)
- 2 払暁の月を宿らす初氷
星野三興(新潟県)
- 3 窓辺から羽太の山も冬景色
佐藤佑子(福島県)
- 4 燕の巢鈍行だけの無人駅
美濃部紘三(新潟県)
- 5 職人の気質こめらる冬囲
竹本美美子(新潟県)
- 6 千年の大樹の芽吹き光満つ
井原毬子(東京都)
- 7 校庭をめぐる老桜友呈し
小林敏宏(長野県)
- 8 白磁の皿割れて真底真冬かな
街より子(埼玉県)
- 9 口喧嘩楽しむ炬燵喜寿傘寿
大橋恒次(新潟県)
- 10 横丁の湯気の惣菜冬めける
今泉卓也(茨城県)
- 11 エスカレーター前もうしろも木の葉髪
中島平八郎(京都府)
- 12 茄子紺に暮れゆく冬の相模灘
宇都宮萬里(静岡県)
- 13 華やぎの極みの舞台菊日和
神作沓江(埼玉県)
- 14 モンローの錆し歌ごゑ冬の川
大曾根育代(埼玉県)
- 15 みあかしに揺れ独吟の虎落笛
村木尚(新潟県)
- 16 極月に太棹をきき涙して
佐藤茂三郎(千葉県)
- 17 デパ地下にをりし堂々故郷の葱
城山憲三(愛知県)
- 18 寒林に己れを残す消去法
大村翔児(愛知県)
- 19 去年今年喜怒哀楽を心して
須澤重雄(長野県)
- 20 秋の田を二人でとばすサイクリング
栗原啓子(埼玉県)
- 21 柿すべてもがれし村の夕日かな
猪股凡生(新潟県)
- 22 アンデルセンの白鳥来ている広瀬川
鈴木与平(宮城県)
- 23 晩年の影折りたたむ小六月
渡辺嘉幸(東京都)
- 24 母の忌や惜しみなく切る黄水仙
田中美智子(埼玉県)
- 25 去年今年棒を捜して見つからず
堀たかこ(大阪府)
- 26 海に帰る風受けとめて大根干す
岩永登茂子(大阪府)
- 27 師走月遥かな友に文を書く
忍正志(兵庫県)
- 28 長生きの余生を綴る日記買ふ
大塚正路(福島県)
- 29 たばねても地味にまとまる野菊かな
佐野一江(静岡県)
- 30 父在らば百八歳や除夜の鐘
佐野和彦(静岡県)
- 31 喧嘩独楽教えてくれて征きしまま
吉村筑紫(埼玉県)
- 32 楡の葉の落ち尽したる冬の雨
松嶋光秋(東京都)
- 33 天界の父母に入れたし柚子湯かな
原田かずゑ(千葉県)
- 34 厄災を祓ふ追儺の豆飛磔
大竹憲弥(新潟県)
- 35 春隣旧跡古道風たたむ
菊池シユン(青森県)
- 36 たつぷりと生きたと思ふ木の葉髪
浅野信廣(宮城県)
- 37 芋を掘る嫁つこ鍬にあそばれり
小野寺裕子(宮城県)
- 38 新米の届きて心豊かなり
山川みどり(山形県)
- 39 朽野の吾より他になく昏るる
小井寒九郎(三重県)
- 40 冬休み常滑窯は火を止めず
早矢仕邦夫(愛知県)
- 41 僧の書く筆太の一字年の暮
田中昶(鳥取県)
- 42 冬菜摘む筈に夕日と山の風
西口東治(大阪府)
- 43 酔芙蓉夕日しづかに重なりぬ
岩崎芳子(静岡県)
- 44 家出猫帰り待ちまち越年す
平賀田鶴子(愛知県)
- 45 鎌研ぐに少し注ぎて秋の水
湯浅芳郎(岡山県)
- 46 キーボード両手で叩く膝毛布
藤沢樹村(東京都)
- 47 牡蠣筏玲瓏と日の没りゆけり
尾崎良雄(三重県)
- 48 的外したるも残心雪磔
重原昇(新潟県)
- 49 鷹匠と女子高生の映りけり
矢野絹枝(東京都)
- 50 なにもかもこんこんちの師走かな
石田福子(静岡県)
- 51 行く秋や三宝院の釘隠し
堀井和(神奈川県)
- 52 小春日の陽を点滴がきらめかす
寺岡文生(静岡県)
- 53 陸前落合駅好きな名前や菊薫る
副島加代子(宮城県)
- 54 行く年のしづかに一人濁り酒
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 55 柔らかに握りて研ぎぬ今年米
伊藤修敬(三重県)
- 56 初雪や庭に立ち寄るけものみち
林ゑみ子(群馬県)
- 57 初湯より妻の声せりすこし艶
吉田未灰(群馬県)
- 58 賀状来る母は好かれる人だった
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 59 限りなく心を閉す冬すみれ
早乙女文子(埼玉県)
- 60 頑に老の一徹冬耕す
山本松柏(三重県)
- 61 山茶花の地に色を置き咲き続く
西村幸子(滋賀県)
- 62 寒菊や人の情けを寄せ付けず
浦橋渴雪(兵庫県)
- 63 逝く年や喜怒哀楽の二文字抜け
植野順聞(大阪府)
- 64 初雪や食べたものにオムライス
小島岳青(新潟県)
- 65 二、三羽は日和見もいて鴨の陣
井上静夫(栃木県)
- 66 自句自解冊子手づくる石路日和
関谷秀二(愛知県)
- 67 小春日に隣の家も窓磨く
富樫和子(山形県)
- 68 数え日や一つ増えたる診察券
大場きよし(宮城県)
- 69 冬將軍世界遺産へ富士囲ふ
浜田蛙城(静岡県)
- 70 霧笛鳴る津軽海峡雪催ひ
三津木俊幸(千葉県)

- 71 古い顔に幼子かこむ初写真
千代田栄次(東京都)
- 72 黄落の彩を閉ち込め池眠る
本田克夫(千葉県)
- 73 短日や埋め盡したる予定表
檜山とり子(東京都)
- 74 飄飄とおのれ生き抜き冬木立
油谷郷史(兵庫県)
- 75 風花は故郷の便りかもしれぬ
長峰正晴(千葉県)
- 76 冬怒濤子と協同の木の積み木
梶鴻風(北海道)
- 77 起き抜けの五臓六腑に冬の雷
小林七重(新潟県)
- 78 都鳥むかしの夢はしたはしく
川崎洋吉(福岡県)
- 79 冬に入る知つて岐る道があり
安木沢修風(新潟県)
- 80 行く年を一人の第九かな
山本直子(大阪府)
- 81 寺床几いつも誰かが日向ぼし
炭崎博(滋賀県)
- 82 正月や闇より堅き下駄の音
乾久子(滋賀県)
- 83 東北の仏もとめて冬の旅
山田幸代(兵庫県)
- 84 皆散つたと残り残されし一葉かな
辻升人(東京都)
- 85 冬日とお好み焼を裏返す
布目雅之(埼玉県)
- 86 気とからだちくはくはくになる年の暮
羽根田明(神奈川県)
- 87 寒月や追い掛けつきの影法師
藤田君江(東京都)
- 88 浅春の谷中の坂に立ち止る
大谷茂(埼玉県)
- 89 はんぺんをイの一番のおでんかな
沢紅子(岡山県)
- 90 大川に葉刈の印流れけり
木下精(大阪府)
- 91 御堂筋銀杏絨緞すつきりと
居原田連星(大阪府)
- 92 木守柿終の一つももう見えす
三ッ木宗一(東京都)
- 93 爽やかやかくも似たりしどんぐり目
野村牟人(東京都)
- 94 山茶花の白一色に朝日差す
宇田川正雄(埼玉県)
- 95 木の実落つ野外授業の児の上に
渡辺茫子(千葉県)
- 96 亀鳴くや甲骨文は意表衝く
津田忠彦(岡山県)
- 97 菊日和一汁一菜馳走なり
中嶋清子(佐賀県)
- 98 あらたしき年の重みや喧し
福岡悟(東京都)
- 99 金星はやつぱり遠い冬木立
棚橋麗未(東京都)
- 100 あかあかと山並そめて冬の朝
野呂瀬則子(愛知県)
- 101 はやぶさに「イトカワ」の麴年新た
高杉杜詩花(北海道)
- 102 陰うつるお化けのような鬼の柚子
星一子(神奈川県)
- 103 若き日の記憶辿りて書く賀状
有坂馨園(福島県)
- 104 長き夜に妻とは別の灯を点す
吉村充治(埼玉県)
- 105 年ごとに暮れ行く老いの短き日
杉村美保子(岩手県)
- 106 手餅の母の温もり冬来る
秦幸子(福岡県)
- 107 日向ぼこ昨日に続くさがしもの
吉野成行(愛知県)
- 108 ひそやかに真珠育む冬銀河
堀木和子(大阪府)
- 109 寝た切りにならぬ願ひのブーツ買ふ
村松知津子(大阪府)
- 110 レクイエム母十一月の星となる
結城良一(福島県)
- 111 母の民話今も声する春炬燵
大久保アヤ子(東京都)
- 112 冬空の雲の描きし世界地図
清まさじ(静岡県)
- 113 一隅を照らす集ひや霜月忌
資延貢(香川県)
- 114 非常食使はぬ幸や去年今年
濱田イサオ(福岡県)
- 115 物陰は木枯かくしほつとぬくめり
坂本正夫(千葉県)
- 116 みみず鳴く法名に灯の流れけり
五十嵐勝敏(新潟県)
- 117 ありし日の母に重なるつわの花
坪田勝秀(鹿児島県)
- 118 寒泳に白禪の伊達揃ひ
増田信雄(埼玉県)
- 119 開戦日青春うばいし日なりけり
田島星景子(宮城県)
- 120 使徒像やピアノシモめき雪ふりそむ
新谷雄彦(広島県)
- 121 譲り合ふ夜の路地裏しぐれ傘
沢井博(群馬県)
- 122 初糶や絵は寂聴のほとけさま
久保和友(滋賀県)
- 123 焚火の輪解け夕さりの一番星
川口襄(埼玉県)
- 124 卓上の触るれば崩れ冬薔薇
秋谷静子(茨城県)
- 125 霜月や雀は空気着て丸し
安藤まこと(岩手県)
- 126 冬帝の御意の風なり荒野占む
澤雅子(大阪府)
- 127 古稀祓い願ひ修める神かな
早川述史(愛知県)
- 128 冬晴れ日迎春準備障子張り
佐野しづ子(愛知県)
- 129 夫の座の欠けて無言の祝箸
堅田秀子(東京都)
- 130 過ぎてゆく時間を見つむ冬の夜
要俊江(福岡県)
- 131 孫ひとり増えて幸せ福寿草
村上千代(大阪府)
- 132 寒卵今宵私は鳥になる
萬濃その子(千葉県)
- 133 煙突の向こうに休む初苗
椋本望生(大阪府)
- 134 夫の背をゆるり沈めて柚子湯かな
堀田寿美子(北海道)
- 135 輩の句研がれ磨がれて去年今年
廣瀬喜代子(岡山県)
- 136 久々に指に冷たし秋の水
藤本由美子(兵庫県)
- 137 年の瀬や山鹿流の音遠く
川合良和(静岡県)
- 138 天平の鴟尾照り合える初御空
行方素芳(東京都)
- 139 ふるさとへ文書いてゐる師走かな
佐藤信(神奈川県)
- 140 鳥渡る地に老人として一人
中岡昌太(神奈川県)
- 141 生まれくる子待つ小春産着買ふ
北嶋八重(京都府)
- 142 清水寺ライトアップの冬紅葉
田中恵美子(山形県)
- 143 柚子二つ肩に乗せけりひとり風呂
北村富士雄(新潟県)
- 144 華やぐも秘めたるころ冬落暉
岩村昇(神奈川県)
- 145 暴れ風連れて長居の雪女郎
桑原幸(新潟県)
- 146 キャンドルの灯ゆれる降誕祭
中村和弘(愛知県)

- 147 還暦といふスタートや春隣
安達輝美(山口県)
- 148 なほらひや長寿祈願の新酒酌む
津布久信雄(東京都)
- 149 姪ぶよすがや薔薇の返り花
大阿久雅子(東京都)
- 150 虫の音の途切れ勝ちなり独の夜
青木ケン子(埼玉県)
- 151 身ほとりも箒目正す十二月
吉澤八千代(群馬県)
- 152 ビル陰に入れば身の透く寒さかな
二ノ宮利江(東京都)
- 153 関八州見渡す六三四初苗
中野豊彦(東京都)
- 154 来し方に悔いなき人生年始め
柳澤京子(宮城県)
- 155 不動明おはす苔岩露しとど
木田亜津子(兵庫県)
- 156 ロシアより雲押ししてくる寒椿
竹澤茂子(大阪府)
- 157 人生の余白まだあり初暦
阿部徳夫(宮城県)
- 158 裏木戸の鍵開いてゐる冬の月
橋本良子(埼玉県)
- 159 過去よりも短かき未来年くる、
内河邦久(東京都)
- 160 この大吉信じておこし神の留守
増本和子(千葉県)
- 161 子の口の真一文字や独楽の芸
秀川淑子(鳥根県)
- 162 世は荒ぶ変らぬ時計御用始め
阿部幸子(宮城県)
- 163 夢持ちて向かふ八十路や初御空
岡村君枝(茨城県)
- 164 青天や鳥影映る白障子
古谷力(東京都)
- 165 五年経て十年日記峠立つ
神一男(静岡県)
- 166 ナウマン象も祖先も十勝寒昂
有田裕子(北海道)
- 167 とりあへずひと言の味寒椿
橋本まこと(栃木県)
- 168 竹人形舞へば越前雪となる
寺尾令子(東京都)
- 169 左手で箸を使ふ子冬温し
中野博夫(埼玉県)
- 170 飴玉と鞭を道連れ初苗
池田岬(埼玉県)
- 171 あつあつの大根の湯氣無事祈願
勝田久美(大阪府)
- 172 ぶちぶちと足の爪切る日向ぼこ
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 173 老いたれど夜長も楽し妻あれば
鈴木蝶次(宮城県)
- 174 モフモフのアルバカ紅葉の山古志に
磯部力(新潟県)
- 175 極月の芝居に一人泣き笑ひ
山崎ゆき(東京都)
- 176 初鏡八重歯の愛嬌ありまする
高垣勝代(大阪府)
- 177 生きる世を二夫にまみえし冬薔薇
大窪美代子(大阪府)
- 178 日当たりのよき家梯梧の返り花
小山たけし(埼玉県)
- 179 吾と今並び歩くは雪女
本間七窪子(山形県)
- 180 錦繡の山を白衣に雪しぐれ
小林隼美(山形県)
- 181 黒々と杉針が翔び初鵞
菅井文男(新潟県)
- 182 錦なすまだどんちよりの冬の山
野中よしみ(神奈川県)
- 183 ぷかぷかと袖子もをどるよ風呂の中
高松愛(神奈川県)
- 184 分校の小さき日溜り冬すみれ
高松ゆか(神奈川県)
- 185 初鳩の留守家の庭を闊歩する
駒場京子(神奈川県)
- 186 晩成を願ひつづけて木の葉髪
木村真澄(埼玉県)
- 187 おしなべて練越しと決め除夜の鐘
井口桂山(新潟県)
- 188 万両や鳥の攻撃如何せん
橋本世紀男(東京都)
- 189 通じ合ふこと捜せずに冬田徑
北野耕兵(千葉県)
- 190 里に出る熊の哀しき生計かな
大下志峰(福井県)
- 191 冬霞琴の調べや円福寺
福田和子(東京都)
- 192 切餅や不揃ひなるも個性あり
石川郁子(埼玉県)
- 193 点滅の小さな出窓クリスマス
山岸伊久雄(東京都)
- 194 喜寿すぎて今度は傘寿大旦
延原令岱(岡山県)
- 195 白樺の幹鮮しき雪の果
安部龍太(山梨県)
- 196 雪原に大河信濃の沈みけり
今井勝子(新潟県)
- 197 雪しまき俄かに生まる銀の龍
長尾俊彦(香川県)
- 198 冬の夜のチャルメラそばも遠くなり
能條憲夫(神奈川県)
- 199 音たてず寒夜ゆつくり仕舞風呂
塩田澄子(千葉県)
- 200 米寿とて払う厄なし初詣で
磯山陽吉(東京都)
- 201 元日に十の掌重ね夢誓ふ
森崎榮久(岡山県)
- 202 食卓に鹿食べ残し畑大根
出井静枝(三重県)
- 203 母の味今も引き継ぐ雑煮かな
紺谷睡花(東京都)
- 204 肩車破魔矢抱く子の誇らしく
池本勇(大阪府)
- 205 鯛大根都度の不出来や今日の出来
佐々木トモ(宮城県)
- 206 陽を包み風を束ねてキンギョソウ
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 207 火を浴びし盃に酌む菊の酒
野中信夫(東京都)
- 208 言の葉は言い方次第花八つ手
井田由利子(宮城県)
- 209 にこにここと犬を曳く子のお年玉
田野井一夫(栃木県)
- 210 健やかといふ幸せの冬帽子
名取美枝子(千葉県)
- 211 伏流の音のまるさよ去年今年
佐野九三子(静岡県)
- 212 ひたむきに愛告げてをり初電話
堀井酔人(茨城県)
- 213 小正月やつと女のお正月
青木日出男(群馬県)
- 214 初旅や行きも帰りも富士の晴
上谷すみゑ(神奈川県)
- 215 銀杏踏む共に歩きし若かりし
中山日出子(大阪府)
- 216 恙無く顔の揃ひて初句会
杉浦俊雄(静岡県)
- 217 さ迷ひて日本列島木葉髪
春口蓮男(静岡県)
- 218 初夢のおぼろげとなる朝かな
伊藤みさ(静岡県)
- 219 一際に光る寒星兄と決め
柴田恵美子(北海道)
- 220 雪しまくローカル線や終電車
植野無人(兵庫県)
- 221 白鳥に初日の出さし淡き紅
長谷部喜代子(大阪府)
- 222 寒中の陽だまりに咲く水仙花
針生清(千葉県)

223 無口なる亡父のため息寒しじみ
武田八重子(神奈川県)

224 美しく老いたくおもふ初鏡
芋木匡子(滋賀県)

225 お身拭い薬師如来や春を待つ
小倉真美子(大阪府)

226 年の夜の梵鐘身うち貫けり
夏目満子(東京都)

227 暖炉焚きジヤズにバーボンウイスキー
石原惟夫(埼玉県)

短歌

228 冬雲の坐らぬ内にひとまわり庭の落葉を片して置かむ
小笠原紗恵子(神奈川県)

229 秋の夜は使ふことなき扇もて月影あふぎ君を偲ばむ
百花清(埼玉県)

230 半身を土中に埋めし捨て墓を守るがごとく捨る花咲く緑川葉子(福島県)

231 丘越えて山路幾まわりバスはゆく支所の職員地震を語る 土屋喜雄(山梨県)

232 白寿の女性の処女詩集を読む「九十八歳でも恋はするのよ」と有りて驚く
木暮珣子(群馬県)

233 欧米の最先端の医療器具日本で直ぐに使い長生き
大川聡(新潟県)

234 介護するされる側として大仕事愛と祈りが二人を支う 野木宗信(奈良県)

235 としなみに美しきことのは崩るるを案じをるのは老いのさしでか
黒澤正行(福島県)

236 増殖のあり方まさに似ておりぬガン細胞は資本のごとし 篠原三郎(静岡県)

237 つがなく過ぎゆく日々に願い込めわが歯車よことなくまわれ
田邊美代子(三重県)

238 病む足をさする夫の手黙々と温かき血が流れ伝わる 田村淳子(新潟県)

239 一片の雪の軽さよ逢わぬ日を降り積む雪の重き悲しみ
金田芳男(新潟県)

240 いつみても朝日笑顔でまんまるないつでも一緒亡き父母祖母と
阿部澄江(宮城県)

241 雨に明けいつしか雪にかわりおり積りに積もる消える定も
田中豊恵(新潟県)

242 故郷は越後に在りて名も消えた三万石の城下町なり 齋藤忠弘(千葉県)

243 頭をたたき正常なれと叫びたし病の発信こより始む
小島秀雄(福島県)

244 私の背を追い越さん日も近き子の寝顔に重ねる幼き面影
若月理依子(新潟県)

245 わが胸に滾ろひ湧ける赤き血が野を一面に天蓋の花 鈴木清美(愛知県)

246 旅せんと夫の形見のマフラーをカバンに詰めて仕度整う 高橋邦子(高知県)

247 せせらぎの音を聞きつつ紅葉を友とめでをり至福のひと時
高須孝(愛知県)

248 球を追う年齢を忘れたるわが娘五十五すぎれど羚羊のごと
櫻井文子(東京都)

249 ほどほどに雪ほどほどに降り給え止むを知らない豪雪の里
山本敏順(長野県)

250 エジプトのファラオの墓に舟を曳く壁画は今も来世へ進む 寒川靖子(香川県)

251 空と海わかたぬほどに降りしきる雪震わせてひびく海鳴り
千木良宣行(埼玉県)

252 猫ジャラン風にゆれる無人駅焔のかがみて草をひきをり
佐々木都(長野県)

253 あわれ人が星のいのちを云々す冬の夜空に光るオリオン
後藤美佐子(長崎県)

254 山茶花の生垣にして冬の朝寒さのなかに凜と咲きある小暮昭司(群馬県)

255 婚約時健康優良児と聞きし妻満八十歳にてあつけ無く逝く
今井忠一(東京都)

256 冬銀河感動を呼ぶベートーベン歓喜よせて歓声あげる五味田幸夫(神奈川県)

257 喜怒哀楽いつも喜と楽でありたしと思いつく落葉道行く 北岡晃(兵庫県)

258 死に近き母に添寝で息の音を聞きつつ見護る暮の病院 佐藤源一(新潟県)

259 車窓より見え隠れする月を指しここにもあつたと声あげる孫
桑原謙一(群馬県)

260 わが背に身体あずけて寝入る孫をそつと揺すって重さ楽しむ
直江秋子(新潟県)

261 目も耳も細り弱りて楽しみの縮みゆくとも健気な食欲 椎忠夫(神奈川県)

262 イマジン国境なんてないのに鈍臭い人間が戦さ始める 暉峻康瑞(鹿児島県)

263 暖室薄暗の手元灯寄せ縫ふ襦袢綻び輝の俤 濱田深雪(新潟県)

264 おだやかな年始に祈る社寺詣り飛躍の年と絵馬に記せり
岩崎令子(大阪府)

265 未熟児で保育器に育ちし満帆ちゃんが笑顔で告げる就職のこと
佐藤古城(埼玉県)

266 忘れてる歳費半減仕分けない
西條公雄(埼玉県)

267 ボケましたとは上手に逃げを打つてい
田澤宏(新潟県)

川柳

268 手料理で女を黙らせる男
黒田るみ子(徳島県)

269 出来ちゃった結婚許す羽目になり
羽田桐柳(群馬県)

270 底辺の暮らしも太陽ふりそそぐ
大江秋月(兵庫県)

271 仮免じゃとても無理です火の車
岡部則正(千葉県)

272 過ぎし日の想いに浸り年賀読む
守屋高雄(岩手県)

273 軒下に小さな点滅蛍族
森本遊笑(兵庫県)

274 諦観の境地に何かウソがある
宮崎正男(群馬県)

275 舞い降りる鶴は幸せはこぶよう
小西忠夫(鳥取県)

276 落葉焼く計報はがきも続けざま
鈴木義雄(福島県)

277 美しい花嫁となりには息子
岡本恵(茨城県)

278 手のかかる仕事いつでもあまわし
横田隆史(埼玉県)

279 同窓会両手にドライフラワーズ
桑原清風(群馬県)

280 夕陽背に深まる胸の孤独感
中原操雪(東京都)

281 友見舞う迂闊に喋るクラス会
石原学(群馬県)

282 法名に「北灯」入れて居士をつけ
藤井北灯(福岡県)

283 踊り子号中は不景気見当らず
森ふく(千葉県)

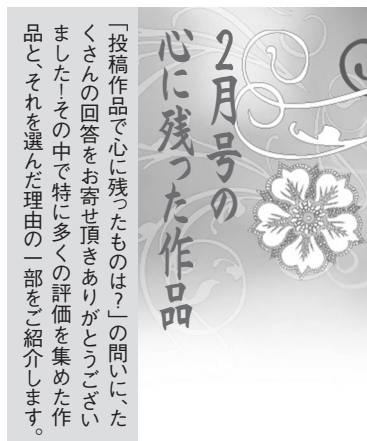
284 山削り建てた家には味がある
松田義登(福岡県)

285 暑の一字今年はどうぞおだやかに
佐伯セツ子(香川県)

286 バラ一輪飾り独りの誕生日
大岩歌子(岡山県)

- 287 よくぞ生き飢えを乗り越え古稀間近
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 288 世話を焼き食べた気のせぬ蟹の鍋
小山恵美子(大阪府)
- 289 幸せが多く心配して居ます
近藤はつみ(福岡県)
- 290 干したイワシの海の郷愁
松田重信(埼玉県)
- 291 サヨナラが言えなくなった春の蟬
大森一甲(兵庫県)
- 292 食べ方が妃に気に入られ宰相たり
諏訪杜夫(埼玉県)
- 293 玄関に知らぬおじさん手に野菜
勢藤隆(群馬県)
- 294 閉めた扉の内側の恋
奈倉楽甫(愛知県)
- 295 夕方になると母さん呼びにきた
益永克之(福岡県)
- 296 隣国に媚を売るか柳腰
藤沢健二(千葉県)
- 297 旨さだけ言葉のいらん日本米
工藤昌見(山形県)
- 298 淋しさはリセットできず年あらた
奥那於子(大阪府)
- 299 半島は38℃熱続き
村岡盛英(群馬県)
- 300 爪楊枝味はまずまず又来よう
原田英一(千葉県)
- 301 半分はおれが作った妻の皺
山崎一嘉(愛媛県)
- 302 亡母の川柳ノートひからびた泪跡
上野啓子(新潟県)
- 303 牢獄に叫ぶ自由の声消され
齊藤安弘(神奈川県)
- 304 ゆつたりと今大切に今生きて
大橋絵代(千葉県)
- 305 足並が揃うと戦したくなる
中島久光(岩手県)

- 306 軒の下赤い手袋待ちぼうけ
中林恵子(大阪府)
- 307 今光る椅子にもあった涙跡
鏡たか子(山形県)
- 308 捨てきれず思い切れずに初の雪
小川よう子(大阪府)
- 309 北風に向つて吠る影法師
高柳閑雲(愛知県)

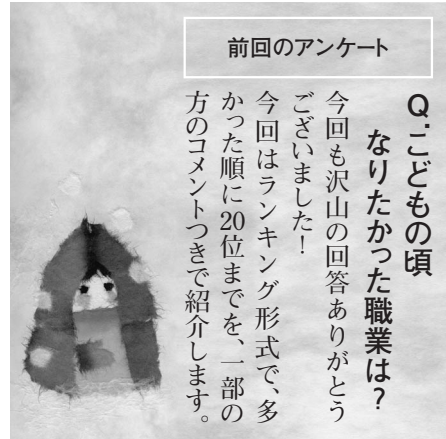


《大賞》
137 除夜の鐘喜怒哀楽の響きかな
橋本世紀男(東京都)

・除夜の鐘が喜怒哀楽の響きと云う発想！一年いろいろあった事を御誌の名前で表わしているところ 井原毬子(東京都)・除夜の鐘作品の通りに毎年聞いております 緑川葉子(福島県)・除夜の鐘のひびきの中に喜怒哀楽を感じるとは面白い 佐野和彦(静岡県)・その通り(人生)うまく表現されている 野木宗信(奈良県)・除夜の鐘は一年間の総まとめ。わかりやすい句で納得 田村淳子(新潟県)・除夜の鐘を聞き一年のさまざまの事が思い出されます 大久保アヤ子(東京都)・世相をよく反映している 五味田幸夫(栃木県)・除夜の鐘のひびき心身引き込まれる。今年こそ良き年でありますように 阿部幸子(宮城県)ほか

- 【自句自解】
除夜の鐘が響き始めますと酔った頭もしゃんとしてくるような気がします。嬉しいことや楽しいことばかりではなかった一年間の出来事が走馬灯のように浮んでは消えていきます。何はともあれ、この一年を無事に過せたことに感謝して、新しい年の家族みんなの健康を祈ります。煩惱から逃れられない未熟者ですが、高望みすることもなくなり、「喜怒哀楽」があるからこそ人生は面白いのだという心境に近づきつつあります。
- 《俳句》
1 在りし日の鉾山の名残りの蔦紅葉
千葉ますみ(宮城県)
- ・廃坑になった山の蔦紅葉の色のあざやかさ 星野三興(新潟県)・閉山後の鉾山はわびしい。名残りの蔦紅葉とは美しくもまた淋し 伊藤修敬(三重県)・今は廃鉾の山も昔は蔦紅葉はきれいであったと思います 山本松柏(三重県)・鉾山の名残りの実感と蔦紅葉が良くあっている 乾久子(滋賀県)・妻の実家は柵原鉾山の近く(同和鉾業)。今は廃坑です 津田忠彦(岡山県)・この句より筑豊の炭坑を思い出します。朽ち行く炭住に絡む紅葉は哀れである 瀧田イサオ(福岡県)・昔三菱金属鉾業所病院に勤務し故郷の方かしら。鉾山全盛時代あつてなつかしい 柳澤京子(宮城県)ほか

- 《短歌》
223 取りおきし粗悪な貨幣にしみつし
戦中戦後の昭和のにはふ
黒澤正行(福島県)
- ・共感します 篠原三郎(静岡県)・作者の心がうまく表現されている 相馬竹浪(新潟県)・多分自分が昭和人だから 千木良宣行(埼玉県)
- 《川柳》
257 火傷せぬ距離でステップ踏むワルツ
桑原清風(群馬県)
- ・たまのダンスは不倫呼ぶ 鈴木清美(愛知県)・私も病氣(心臓機能障害)以前はダンスに猛烈励んでいたので同感の極み!! 中原操雪(東京都)・びつたりくついで踊りたいとこですがさうもいかない。中嶋秀次郎(埼玉県)・気にしておられるお相手かも。私もダンスしています。カップルになれる方もあります 小山恵美子(大阪府)・私は握手しただけで情が移ります。ダンスなど恐い!! 勢藤隆(群馬県)・定年後の数年、覚え切れずにあきらめたダンスの想い出を。坂詰進(福島県)・よくある話、ダンス夫婦という言葉が……。ユーモアの中の危険? 岩崎令子(大阪府)
- 《その他》
14 減反の故郷より届く今年米
堅田秀子(東京都)
- 15 地底より生還果し天高し
井原毬子(東京都)
- 235 電話さへ扱へなくて昭和者置き去られたる悲感や強き
鈴木清美(愛知県)
- 249 癒えぬこと知りての看取り五月雨る
機部力(新潟県)
- 277 どの色も好きで染まらぬことにする
田澤宏(新潟県)
- ※今後もふるってご投稿をお願いいたします!



前回のアンケート
**Q.子どもの頃
 なりたかった職業は？**
 今回も沢山の回答ありがとうございました！
 今回はランキング形式で、多かった順に20位までを、一部の方のコメントつきで紹介します。

- 第1位 教員(保育師含む)**
- ・担任の先生(小学四、五年)に憧れ師範学校へ入学し、成りました
 石井美智子(埼玉県)
 - ・恩師の影響も大きかったのでしょうか。小学校二年生のとき小学校の先生を夢みていました
 田澤宏(新潟県)
 - ・小学校の先生でとても美しい先生が受けてくれた為、自分も憧れて教師になりたいと思った。高校教師になりました。
 木暮珣子(群馬県)
 - ・その年代年代に教師にとばくせんと思っていました。一番好きだったのは歌うことだったので、大志までには至らず。
 富樫和子(山形県)
 - ・実現はしましたが自分の子供と過ごす時間を選びました
 岡本恵(茨城県)
 - ・なりたかったというより「なるべき」そんな環境でした
 櫻井文子(東京都)
 - ・中学校の教諭(昭和49年3月辞す)
 福岡悟(東京都)

- ・あまり深く考えていませんでしたが子供が好きで幼稚園の先生だったかも
- ・その通りに38年教師でした
 小山恵美子(大阪府)
- ・三年生の担任の先生がいつも笑顔で誰にでもやさしかった
 秋谷静子(茨城県)
- ・なっていたなら世の中が少し変わっていたかな
 吉澤八千代(群馬県)
- ・やさしい学校の先生
 木田亜津子(兵庫県)
- ・教師か医師になりたかった。その夢もさず海軍予科練へ、そして終戦
 神一男(静岡県)
- ・数学の先生、一番楽しかったので
 青木日出男(群馬県) ほか
- 第2位 軍人**
- ・山中峯太郎の小説「敵中横断三百里」「星の生徒」などに刺激され、陸軍幼年学校を受験、身体検査不合格で挫折。のち兵役で甲種幹部候補生となり、陸軍士官学校在籍中に敗戦。
 神田九十九(東京都)
- ・今では考えられませんが「兵隊さん」でした
 羽根田明(神奈川県)
- ・悪夢のような時代の職業軍人
 大谷茂(埼玉県)
- ・軍国時代だったから 軍人かなあ？
 山本敏順(長野県)
- ・学生時代から訓練を受けていました
 五十嵐勝敏(新潟県)

- ・職業軍人を十四才に予科練を志願し六ヶ月にして敗戦となり、以後一八〇度転換し戦争は無駄なこと平和こそ地球が必要なものと生きている
 菅井文男(新潟県)
- ・七ツ卸の予科練、お国のために役立つ人間になりたかった。死はおそれなかった。
 延原令岱(岡山県) ほか
- 第3位 看護師**
- ・子供が看護師からケアマネージャーになつて働いています
 杉村美保子(岩手県)
- ・白衣の天使にあこがれました。もしなれていたら吾子を亡くさずにすんだかもしれません
 堀田寿美子(北海道)
- ・看護師さん、それも戦地に行かれる、お国のためになりたかった
 塩田澄子(千葉県)
- ・小四の時盲腸の手術をして40日間入院。その時はじめて牛乳を飲ませてくれた看護婦さんが天使に思えて
 岩崎令子(大阪府)
- ・ただし、血を見るのが怖いので夢は叶いませんでした。
 名取美枝子(千葉県)
- ・念願叶って一生涯の天職として四十五年間勤めを果たし今はのんきに暮らしております
 伊藤みさ(静岡県)
- 第4位 パイロット**
- ・国際飛行を夢見て有坂馨園(福島県) 制服へのあこがれがあった
 長峰正晴(千葉県)

- ・視力が悪くて断念。残念
 梶鴻風(北海道)
- ・空を飛ぶ飛行機の機長です
 小暮昭司(群馬県)
- ・夢中で食物ばかり気にしてあえて云えばパイロット
 沢井博(群馬県)
- ・今も持ち続けています
 北岡晃(兵庫県) ほか
- 第4位 作家・小説家**
- ・読書が好きで物を書く仕事
 松田義登(福岡県)
- ・小学校六年生の時に、先生になりたい職業を書かされて「小説家」と書いた記憶がある
 北村富士雄(新潟県) ほか
- 第6位 技師系**
- ・自動車、飛行機の整備士(現在酒類小売店 自営業)
 重原昇(新潟県)
- ・機械技術者 昭和十四年に長岡工業学校、受験合格したのですが祖父に長男が農家を継がない事で反対され：
 井口桂山(新潟県)
- ・一級無線通信技師として国際線の汽船に乗り込み全世界を巡るのが夢でした
 佐藤古城(埼玉県) ほか
- 第7位 画家**
- ・画家：現在進行形須澤重雄(長野県)
- ・末は博士か大臣かとそれ程の力も無いのに考えたものだ。絵かきになりたかった
 浦橋克行(兵庫県)
- ・今サラリーマンを卒業して毎日描いています。
 千木良宣行(埼玉県)

・彫刻、絵画など夢のようなものでした
がエッヘ…失礼！ 池本勇(大阪府)
・日本画の世界に憧れたことを思い出
します 中村和弘(愛知県) ほか

第8位 学者・博士
・天文学士 夢叶わず
城山憲三(愛知県)

・通知表がオール5のときもあった
・数学者：父のあとを継ぎたかった
濱田深雪(新潟県) ほか

第8位 記者

・新聞記者 高校時代新聞部に所属
佐野一江(静岡県)
・小六の頃は新聞記者になりたいと思っ
ていた 川崎洋吉(福岡県)
・記者になって世界へ行きたかった
福田和子(東京都) ほか

第8位 警察

・小六の卒業文集に「婦人警官になり
たい」と 小川よう子(大阪府)
・「おまわりさん」格好良かったから。ほ
んとはむつかしいことなど考えずにほ
けりとしていたんです
杉浦俊雄(静岡県) ほか

第8位 鉄道関係

・鉄道員特に機関士 百花清(埼玉県)
・今は無くなったデネット(新潟交通(株)
電車部)に43年間勤めました
金田芳男(新潟県)

第8位 船乗り

・船長 外国へ行きたかったから
星野三興(新潟県)

・船員になりたかったが頭悪過ぎタナー
齋藤忠弘(千葉県) ほか

第8位 医師

・先生に理数科ほめられ、医師。笑っちゃ
いますね 佐瀬チエ子(神奈川県)
・なりた職業は医師でした。夢は果た
せず、小役人で終わりました
新谷雄彦(広島県)

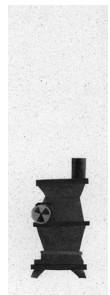
・女医 澤雅子(大阪府)
・医者、特に外科医。しかし小学校で蛙
の解剖を体験して断念！
仁藤ひろじ(埼玉県)

第14位 その他医療関係

・薬剤師 医師、薬剤師の兄妹にかこま
れ。英語の苦手(本当はドイツ語時代)
を、現在残念に思います。子や孫をう
らやましく嬉しく眺めています
高須孝(愛知県)
・子どもの頃は：思い出せませんが医師
もしくは薬剤師だと思います
吉井孝一(新潟県)
・医薬研究者―成就しました
古谷力(東京都) ほか

第14位 音楽家

・子供のころは分かりません。むしろ七
〇歳を過ぎて音楽の道へ進めばよかつ
たと思います 宇都宮萬里(静岡県)
・ピアノスト 神作洸江(埼玉県)
・家族でオーケストラをやってみたかつ
た 村岡盛英(群馬県)
・作詩家 歌手、夢で終わりましたネ
植野無人(兵庫県) ほか



第14位 科学者

・実現度は…半分くらい
勢藤隆(群馬県)
・科学者特に天文学者に成りたかった
田野井一夫(栃木県) ほか

第14位 女優・俳優

・ズバリ「女優」です。…「いろんな人に成
れておもしろそう」と単純に思ってい
ました 小林七重(新潟県)
・映画スター(三枚目)
吉田未灰(群馬県)

・子どもの頃は戦争一色でしたが、少し
長じて新劇女優に憧れました
増本和子(千葉県) ほか

第14位 大工

・三男坊で自分の家が作れるから。結末
は全然異なる。太平洋戦争が始まり
飛行機に 吉野成行(愛知県) ほか

第14位 ファッション関係

・洋服の先生
大久保アヤ子(東京都) ほか

第20位 お花屋さん

・なれなかつたけど今も家に花を絶や
さないように心がけています。
若月理依子(新潟県) ほか

第20位 建築家

・一級建築士になり満足した仕事をた
くさんさせて頂きました
美濃部紘三(新潟県) ほか

第20位 探検家

・小学四年の授業で「アフリカの家の壁
は金を含んだ土で塗ってあるそうなの」

を聞いて。八十才を過ぎても地球博物
館の友の会として山歩きです
野中よしみ(神奈川県) ほか

第20位 バレリーナ

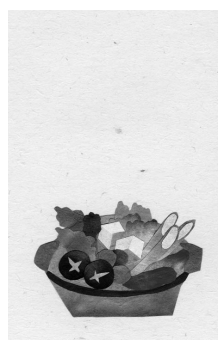
・踊ることが好きだったので「バレリー
ナ」。親は「薬剤師」だったようです
池田岬(埼玉県) ほか

第20位 プロ野球

・甲子園に出たかったが夢に終わしまし
た。
・当時私の小・中学校には野球部は無
く、ハンドボールの選手に成った
早川述史(愛知県) ほか

その他あげられていた職業

弁護士／アナウンサー／お菓子屋さん
／会社員／客室乗務員／僧侶／日本舞
踊／農業／美容師／編集者／牧場／本
屋／マンガ家／茅葺屋根職人／宇宙飛
行士／内閣総理大臣／写真屋／カウ
ボーイ／うどん屋さん／DJ／公務員
／道化師／舞子さん／竹細工職人／木
工職人(ろくろ細工)／怪人二十面相／
企業家／靴屋／シエラ／電気屋さん／社
長／商人／おすもうさん／鉦山技士／
バスガイド／浪曲師／下駄屋／裁判官
／女行員／通訳／バスの運転手／衆議
院／探偵／指物師／お寿司屋さん／声
優／ジャーナリスト／作庭家／和文タ
イピスト／お嫁さん／俳人／パン屋さん



川崎市にお住まいの相原孝様よりお正月にまつわるエッセイをお寄せいただきました。

少年期の戯言 相原 孝

「む、す、め、ふ、さ、ほ、せ」なんと快い響きではありませんか！小倉百人一首の馴れ初めは、今から六十年前になるでしょうか。我が家では正月の恒例行事として、家族親戚あるいは近隣の愛好者が集い、「かるた取り」をしておりました。

熱気ムンムン楽しそうに小生も仲間片隅に席をおき、目の前の一枚の札を眺めていたその時です。「契りきなかに袖をほりつ 末の松山 波越さじとは」と読むべきところを、読み手が「末のまつちゃん」と読んだのです。偶然にもその札だったので。喜び勇んで取りました。それが小生最初の取札となり、十八番の札ともなったのです。

五年程過ぎたころでしょうか、歌の意味が少しずつ分かるようになり、自分ながら「おませ」な歌を好んでしまったのだらうと…。

先程の「むすめふさほせ」とは即ち百人一首の一枚札を称しております。例えば「村雨の霧たちのぼる秋の夕暮れ」の「む」とか、「めぐり逢いて雲隠れにし夜半の月かな」の「め」などは読み手の第一声で取る事が出来るのです。だから取り手側は耳をそばだてて、今か今かと待つのです。

皆様ご承知とは思いますが、百人一首の遊び方として「源平」と「ばら」があります。お正月のある日、姉たちと京橋の叔父のところに新年始に行った時のことでした。もう既に始まっており、早速私たちも入れられました。小生の相方は次姉となり、競技はなかなかの好勝負となりました。終盤戦を迎え双方とも残り札一枚ずつとなりました。この後が運命の分かれ道でした。読み手の第一声を聞き、「君がため」で自

陣の札を取り、宿敵姉に勝てたと喜びも束の間、「お手つきだよ」と言われ負けてしまったのです。偶然のいたずらとでもいうのでしょうか。「君がため借しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな」君がため春の野に出でて若菜つむ我が衣手に雪は降りつ」と残り札二枚の上の句第一節が同じだったのです。勝敗のこだわりよりも不勉強さを悔いたものでした。

それからというものの、姉にはなかなか勝てませんでした。やがて勝つ時が巡ってまいりましたが…。

それではここで「むすめふさほせ」の歌を添えさせていただきます。

村雨の露もまだひぬまきの葉に
霧たちのぼる秋の夕暮れ 寂蓮法師
住みの江の岸に寄る波よるさえや
夢の通ひ路人目よくらむ 藤原敏行朝臣

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に
雲隠れにし夜半の月かな 紫式部
吹くからに秋の草木のしをるれば
むべ山風をあらしといふらむ 文屋康秀

さびしさに宿を立ち出でてながむれば
いづくも同じ秋の夕暮れ 良運法師
ほととぎす鳴きつる方を眺むれば
ただ有明の月を残れる 後徳大寺左大臣
瀬を早み岩にせかるる滝川の
われても末に逢はむとぞ思ふ 崇徳院

この七枚の札を始めとして、百枚の札を競い合い取り合うのです。私たち初心者でもかなり白熱したものでした。ましてや、テレビでご覧のとおり名人戦のような高度な競技者ともなると、想像を絶するほど凄まじいものです。優雅に見えるですが、目、耳、手、足、腰そして反射神経を要する全身運動の競技です。従い身体のためには大変良いのではないのでしょうか。五十年も「かるた」から離れてしまいました。七十路を過ぎ再び始めてみようかと思う昨今です。

2011年手帖完売!

手拭いに「喜怒哀楽」の文字を染めた弊社オリジナル「2011手帖」および手拭いは、おかげ様で完売いたしました。ご愛顧に感謝いたします。来年もぜひお楽しみに!

ホームページのスタッフ写真更新

新しい年を迎え、スタッフの写真とコメントが新しくなりました。各人、今年の意気込みの程は…? ぜひ覗いてみてください。

ポストカード発売中!

一歩一歩、春の足音が聞えてきそうな季節です。ご好評をいただいております弊社のオリジナルポストカード、今回は「アネモネ」を1枚同封しております。ご希望の方は同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、今すぐ必要金額分の切手と一緒に封書にてお申し込みください。

【春バージョン】1組8枚入り(500円)

アネモネ、オトメツバキ、スイピー、タンポポ、ノビル、ピオラ、ヒヤシンス、ムギ



Q. こどもの頃なりたかった職業は?

木戸 敦子



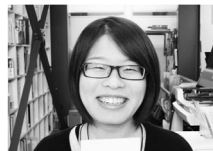
バレーボールの選手、魔女、医者、科学者、ツァコン…の後は極楽とんぼ。実際は銀行員ののちに——と1つも実現していません。流れに逆らわず、ケセラ・セラでこれから!

古川 久美子



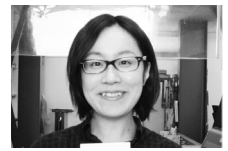
お花屋さん、とかお菓子屋さん、などいろいろ書いたような気もしますが、なぜか「小説家」とか「本屋さん」とは書かなかったなあ……。まさか、作る側にたつとは露知らず(笑)。

菅 真理子



「大人になったら何になる?」「進路は?」と聞かれると答えに窮する子どもでした。でも本は好きでした。いまこんなに楽しく仕事ができていることを、あの時の私に伝えたい(笑)

仲由 真実



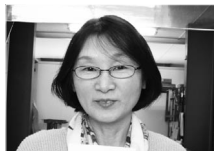
ピアニスト。3歳頃になにかのコンサートに感動して決心した記憶があります。その後いろいろな職業にあこがれては夢ばかりみていました…。

上村 真智子



ファッションデザイナー。里中満智子、一条ゆかりの少女漫画にでてくる主人公の職業だったけれど、すぐ憧れ、ノートにはデザイン画のつむりのドレスをまとった女の人を沢山描いて悦に入りました。

金子 ゆり子



小学生のときは、教師か看護婦(師)さん、なんて思っていました。が、中学生になるとバレーボール、高校生になると卓球(クラブ活動)、そして友達とわいわいが楽しくてなにも考えませんでした。今頃になって勉学に目ざめてます。

石山 由希子



「大きくなったら…」と聞かれるたびに「うーん」と迷い、夢のある友だちをうらやましと思いつながらあまり考えもなく銀行員からスタート。だんだんやりたいことが絞られて今に至ります。

山田 千秋



おかあさん。でもなりたい理由は家に居れて楽そうだったから。幼稚園に行くのが嫌だった…。なれたのです。が、楽(たの)しいけれど楽(らく)ではないです。

吉田 瞳



中学校の文化祭でポスターを作ったのがきっかけでグラフィックデザイナーになりたいと思ひ、それからはデザインの分野へまっすぐ。生みの苦しみの後の何ともいえない感覚。生まれ変わってもデザインの仕事がしたいです!

●お客様の「リレーエッセイ」

堀家の人々

神山妙子

軽井沢で堀辰雄夫人の多恵子さんに二、三度お会いすることができました。初めてお目にかかった時、すでに九十歳を越えておられました。背筋をピンと伸ばし、淡いピンクのパンタロンスーツを巧みに着こなして、はつきりとした言葉遣いをなさるとも魅力的な方でした。残念ながら昨年四月お亡くなりになりましたが、その後養女の和世さん（多恵子さんの姪）からうかがった堀御夫妻の話を御紹介したいと思います。

小学校一年の頃、追分の父の所へ行くと、母に「和世ちゃんが来たよ。お菓子をあげなさい」と言います。どうも父は子供が苦手だったのか、体よく追り返されたような感じでした。夜は江戸時代から続く旅館油屋の横の蛙がうるさいと言うので、母は石を投げては黙らせに行っていました。そういえば、土地の人が鶏を持ってきて下さったので、母が絞めて冷蔵庫に入れておいたら、翌朝生き返っていて大騒ぎ

になったこともありました。

高校生の頃（昭和二十六年頃）小説家の父なのだから何か質問をしなればよかったのですが、父は「作品というものはそれぞれが感じればよいので答えなんかないんだ。僕の作品なんかあまり読まなくてもいいよ。高原を歩いたりして何も無い所で楽しみを見つける方がよほどよいことだよ」と言うだけでした。それから父は蒲団の上に座り、母と三人で食事をしました。月がきれいな夜で、信越線の汽車の石炭をくべる火が見えました。父は昭和二十八年五月に亡くなりました。母は生前、辰雄は野薔薇が大好きだったので、辰雄の命日を野薔薇忌と名づけたと言っていました。

母は元気な人で、八十過ぎまでよく海外旅行に出かけていました。また夜中に部屋の模様替えをするのが好きで、朝テーブルの位置が全く違っていたりするので、食べることも大好きで、福永（武彦）さんみたいになってはいけなないと、晩年まで百グラムのステーキをおいしそうに味わっていました。最期は、皆さんに助けられて本当によい人生だったと言って、スーツと静かに息を引き取りました。

風立ちて野薔薇の園に逝き給ふ

妙子

新潟ぶらり

★安吾風の館(旧市長公舎)



な施設を楽しめる。

その西大畑町に「安吾風の館」がある。ここは大正11年に完成した旧市長公舎で、平成21年より西大畑出身の坂口安吾の資料館として一般公開されている。

邸宅の敷地内に入ると、正面に竹林が。風が吹けばさやさやと爽やかな音がしてきそう。安吾が好んだ「風」という言葉が名前についた建物にピッタリだと思えば、玄関へ向かう。

旧市長公舎は、政令指定都市の中では現存する最古の市長公舎といわれている。新潟市が坂口家から寄贈された8千点に及ぶ遺品・所蔵資料の品々を、整理・分類して、様々なテーマで展示している。

玄関から中に入ると、受付のかたがわざわざ部屋から出てきて、いろいろな資料の中から安吾に関係するパンフレットを選びすくって、「他にほしいも

のがあったら取ってね」と声をかけてくださった。ありがたい…。

座敷のテーブルには、アンケート「安吾の作品で一番好きなのは？」の集計結果などが置かれていた。安吾の成長の坂口綱男氏が撮影した写真などもあり、庭園を前にしながら、じっくり過ごせる場所だった。

展示室では現在、「安吾によせる思い—安吾忌—」(開催期間は平成23年3月21日まで)が展示されている。安吾が亡くなって55年が経つ。安吾忌は、安吾の友人や知人によつて、毎年続けられてきた。展示では妻の三千代さんが参加した40回までの安吾忌を、写真や新聞記事、案内状などで振り返る。安吾フエスティバルのポスターや、安吾が愛用した文具やライターなども見ることが出来る。原稿用紙には、坂口安吾の名前が入っている。これは流行作家の証だとか。赤い亀の鉛筆削りなどを見ると、妙に安吾に親しみが湧いてきた。

この「風の館」の近くには、新潟で少年期を過ごした安吾の生家跡や関連の石碑もある。晴れた日に、安吾も歩いたかもしれない道をぶらりとするのもいいかもしれない。

(仲由真実)



住/新潟市中央区西大畑町5927-9
☎/025-222-3062

★巻菱湖記念時代館

将棋に詳しい方ならご存知、もしくは遠からざる存在なのだろうか。「菱湖」という駒銘があり、タイトル戦などで使われる高級な駒などに用いられている。その「菱湖」で知られる巻菱湖は、新潟が生んだ幕末の書家である。「幕末の三筆」というのがあるそうだが、菱湖はその一人だ。

弊社からも近くの新潟市東区河渡に、菱湖の書を見ることが出来る記念館がある。巻菱湖記念時代館。展示品の一部は、ガラスを隔てず、直接味わうことができるという珍しいところである。当館の開設は、偶然に菱湖の作品をみた磯島岩雄氏が、衝撃を受けたことがきっかけだという。磯島氏は、その偶然の出合いから菱湖に興味をもち、作品を収集。菱湖の作品や人となりを伝えようと、収集物を展示することとした。



そんな衝撃を与えた菱湖の書風は、磯島氏によれば「平明で端麗」。私の、素人の率直な感想としては、すっきりとしていて、きれいで判りやすい字。驚くのは、菱湖が七つもの書体を巧妙に書くことができたということだ。篆書、隸書、楷書、行書、草書、仮名、飛白。たくさんさんの書体があるので、その中でどれか見劣りのするものがあったてもよさそうだが、そうではないという評価。本当に凄い。

十九歳で江戸に出て書と漢詩を学び、三十一歳で書塾を開いた菱湖には、一万人も弟子がいた。同じく「幕末の三筆」の一人である市河米庵の弟子は五千人であったというから、その人気のほどがうかがえる。その後明治初期には書道教科書の主流となったので、菱湖を「お手本の人」として知る人もあるかもしれない。

菱湖は酒好きで豪放磊落な性格であったことが伝えられているが、菱湖の真骨頂といわれる細字からは、大変な緻密さや、並々でない集中心力といったものを感じる。また、菱湖は非常に勤勉で、四十代、五十代になつても常にも常に勉強を続け、書風の刷新を図つたといわれている。「書は人なり」という言葉があるが、多くの人が菱湖の書に魅せられるのは、やはり菱湖自身の生き方がとても真摯で、人となりが魅力的であったからだと思う。

新しい年が始まり、もうすぐ春になる。年も一つ重ねることになるが、どんどん新しく、成長をしていきたいという気持ちになった。(菅真理子)

株式会社養玲社巻菱湖記念時代館
住/T95000015
新潟市東区河渡庚296633

☎/025-271-9567
入館料/500円
開館時間/平日9時~17時(最終入館16時30分)
日・祝日10時~17時(最終入館16時30分)
休館日/毎月29日・31日
お盆・年末年始(12月25日~1月20日頃)



詠み人の『リレーエッセイ』

あわて者の幸運

高田正子

喜怒哀楽書房の木戸敦子さんはあわてん坊だそうなお会いしたこともないのに何故そんなことをつて？ それは、初めましてのメールで私がいきなり粗相をし「すみません。粗忽者なもので」「いいえ。負けませんから」というやりとりがあったから。そのときのお返事が「ふんっ」とばかりに胸を張っているようで、信用できると思ったからだ。だから本当は「知つて」はいないのだが、いわゆる同族の勘で匂いを嗅ぎ当てた気がしている。

深く考えずに思いつきでささっと動いて、とてもよかったと思うことが一つある。

ときは一九九六年に遡る。当時私は、大阪は吹田市に住んでいた。七月、このエッセイの前の走者である森賀まりさんの第一句集が刊行された。その一冊を賜ったお札の手紙に、私は「子連れで吟行しませんか」と書いたのだ。それ以前には二度お会いしていた。お互い幼い子どもを抱える身の上で、ゆっくり話す時間もないような出会い方であったが、同世代、コブつき、俳句が好き、という共通要素があればそれで十分と思っただけだった。

あとになってよくよく考えてみると、まりさんは俳句を作る機会にお困りではなかったかもしれない。なにしろご主人は田中裕明という若手トップランナーの俳人だったから、田中さんを中心とする句会に参加なさってもいたし、家庭内句会だって可能だったはずだ。が、そういうことに思い当たったのは、実はずいぶん後に

前回まで「執筆いただいた森賀まりさんからは「長年通信句会をともしやっている大切な友達です。とてもきちんとされているので締切り等のご心配は無用です」とのご連絡。はい、早くに原稿をお寄せいただきました！俳句が生活に溶け込んだ楽しいお話が聞けそうです。

なつてからだ。なぜなら、すぐに「やろう」という返事が届き、メンバーが決まっていたから。当時はメールなど身近ではなかったし、わが家はファックスすらまだ入れていなかった。家事と子育ての合間をぬって郵便と電話で連絡をとりあい、予定を調整しあつて、初めての吟行句会をしたのは次の年の三月だった。ああ、なんて気が長かつただろう、私たち。

引返しつつ苗札を読んでをり 森賀 まり

春風や玉子サンドを食みこぼす 栗原利代子

煤汚れせず靴が過ぐ草の角 福本めぐみ

吟行場所には、阪急京都線と千里線が交差する淡路の商店街を選んだ。めぐみさんの句が「らしく」ないのは欠席投句だったから。添えられていた手紙には「思いがけず楽しい（と思われる）句会が発足して、嬉しくて嬉しくて」とあつた。「神社散策よりも句ができた」というまりさんからの速達（！）も残っている。「子どもがちつとも邪魔にならず、普通のお買い物のように」とあるところをみると、当初のコンセプト通り子連れで敢行しようだが、本当に邪魔にならなかつたようで、まるで記憶にない。

ファックスを導入し、二年後に私が神奈川へ引越してからはメールを使うようになって、もう十年以上この句会は続いている。初日の私の句？ それは内緒内緒。

●プロフィール

1959年岐阜県生まれ。大学卒業間際に師の黒田杏子に出会い、1990年「藍生」創刊と同時に参加。句集に『玩具』『花実』（第29回俳人協会新人賞）。著書に『子どもの一句』。

編集後記

「あっちゃん」、と数千人が吐き出される大学の通用門で呼び掛ける母の声が甦る。右も左もわからぬ親子、よくもあれだけの人数の中、それぞれの学校でもしっかりと私を見つけ出したものだ。時は受験シーズン真っ盛り。今度は私が見つける番。生み出されたからには同じ場所にはとどまれない。遠からずいなくなる娘のため、2月は東奔西走。ちゃんと見つけられるかな。何を思うんだろう、何を思っていたんだろう。そして彼女が願うことを願っている。どうせ進まなければならないなら、色々味わって進みたい。（木戸敦子）

2011. 2. vol.54 (2011年2月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージーズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

喜怒哀楽書房



株式会社ミュージーズ・コーポレーション

☎ 0120-819-395

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com